

「サウロ、使徒たちと会う」

2024年02月08日

サウロはエルサレムに着き、弟子の仲間に加わろうとしたが、皆は彼を弟子だとは信じていないで恐れた。しかしバルナバは、サウロを引き受けて、使徒たちのところへ連れて行き、彼が旅の途中で主に出会い、主に語りかけられ、ダマスコでイエスの名によって堂々と宣教した次第を説明した。それで、サウロはエルサレムで使徒たちと共にいて自由に出入りし、主の名によって堂々と宣教した。また、ギリシア語を話すユダヤ人と語り、議論もしたが、彼らはサウロを殺そうと狙っていた。それを知ったきょうだいたちは、サウロを連れてカイサリアに下り、そこからタルソスへ送り出した。（使徒9：26～30）

パウロはガラテヤ書1章で、下記のように書いている。恵みによって召し出され、異邦人に御子イエスを告げ知らせるようにされた時、誰にも相談せず、エルサレムにも上らず、アラビアに出て行った。アラビアのどこか、また、どれくらいの期間かは分からないが、心の整理をするための猶予期間ではなかったか。アラビアから再び、ダマスコに戻り、3年後にエルサレムに上った。しかし、主イエスの弟ヤコブを除き、他の使徒には会わなかった。この記述は、パウロの生まれ変わりを述べている。ユダヤ教徒として、ダマスコのイエス信者を迫害しようと思気込んでいた時は、大祭司に迫害の許可証・お墨付きをいただいて、迫害に向かっていた。上の権威にすがっていたのである。ところが、アナニアによって主イエスを信じる者になった時、誰にも相談せず、エルサレム教会の使徒たちから宣教許可証・お墨付きをもらおうともしなかった。パウロは、主体的に自立した自分に生まれ変わったことを公表している。その後のパウロの宣教は、誰にも臆せず、堂々と自分の宣教を貫いている。キリストを信じるということは「私」になるということである。

使徒言行録の著者ルカは、サウロは回心の数日後から、イエスこそ神の子であると宣教し始めたと書いている。ところが、ユダヤ教徒がサウロを信仰の裏切り者と見なし、殺害を企んだことを知って、サウロの弟子たちは彼を籠に乗せ、町の城壁伝いにつり下ろして逃がした。その後、どれくらいの日数が経っていたか分からないが、サウロはエルサレムに行った。もちろん、教育を受けたファリサイ派の仲間の所ではなく、主イエスを信じるエルサレム教会を訪ねたのである。ところが、サウロがイエス信者を迫害したことを知っている教会では、恐れて、仲間として受け入れなかった。その時、バルナバ（「慰めの子」という意味）という人が現れる。彼はキプロス島生まれで、畑を売って使徒たちの足元に置き、原始エルサレム教会の信徒となった人である。彼が、サウロは旅の途中で、復活したイエスと出会い、回心し、ダマスコで堂々と宣教した人であることを、使徒たちに執成した。バルナバの執成しによって、サウロはエルサレム教会に受け入れられた。後にまた出て来るが、バルナバの存在はサウロにとって非常に大きい。

サウロは弟子たちと共にいて、宣教に励んだ。彼はギリシア語を話すユダヤ人と語り、論争もした。しかし、彼らはサウロの宣教を受け入れず、裏切り者として殺害を狙うようになった。これを知ったエルサレム教会の信者たちは、サウロを連れて、地中海に面したカイサリアの港まで下り、サウロの生まれ故郷であるタルソスに送り出した。彼はここで悶々と日々を送ることになる。一方、教会はユダヤ、ガリラヤ、サマリア地方で築き上げられ、主イエスを信じ、聖霊に励まされて生きる信者の数は増えていった。迫害を逃れた人々によって宣教は広がった。マイナスをプラスに変える宣教力を与えられたのである。